

『教行信証』の書写と異同

—「御自釈」を中心に—

富島 信海

はじめに

令和五年（二〇二四）は浄土真宗の立教開宗八百年にあたりとされ、五十年ぶりの慶讃法要を迎える。親鸞聖人が後半生をかけて書きあげた『教行信証』は、八百年に及ぶ長い時間の中で多くの人々に読み継がれてきた歴史でもあるから、その意義を問い直す機縁ともいえよう。幸いにしてその大部分が残存する自筆の坂東本（真宗大谷派蔵）を中心として、我々の手許に届くまでに数多の「書写」が行われてきた。そうした行為の実態を考察することは、『教行信証』がどのように存在してきたのか、また人々が『教行信証』をどう書き写し、どう読み、どう伝えてきたのかを明らかにすることに寄与することと思う。

『教行信証』は、書写や出版などを通して現代まで伝えられてきたが、その流通・伝持の初期ともいえる中世に成立した諸本間には、少なからず相異が見られる。書写本の成立や伝授の場となった本願寺においても、調巻や形態、文体などを異にする数種の本が製作され、諸文が併存する状態にあった。こうした状況とその原因を探り、その意味を考えるのが本研究の目的である。具体的には、『教行信証』の書誌学的ないし文献学的研究が盛んとなっ

た近代以降に公刊された翻刻・写真を活用し比較検討することで、本文の「書写」と「異同」の把握を行う。これを『教行信証』の中核をなす「御自釈」を対象として行い、聖教の同一箇所において同時あるいは同所に異文や異読が存在するといった事態が生じたのは、中世においては本文を保存することを前提に、書写者による考証を経て形成された内容が、それぞれに保存されてきた結果であることを示す。このことを通して、書写行為の意味を考えてみたい。

一、『教行信証』研究の進展と本研究の課題

近代以降、『教行信証』の古本調査や複製本・影印本の公刊が行われ、書誌学的研究が進展した。従来は限られた者のみが閲覧を許される環境であったが、資料公開によってより多くの者が研究に参画し、次第に『教行信証』諸本の成立や系統などが明らかにされてきた。平成期には、親鸞聖人七五〇回忌（二〇一一年）を機縁として、坂東本と西本願寺本（本派本願寺蔵）のカラー複製本がそれぞれ製作されたが、坂東本の修復時に見つかった角点は、墨書と朱書との間をつなぐ時期の親鸞自身による書き入れとして注目され、今後の『教行信証』研究においても重要な発見の一つと位置づけられる。その後も古写本・刊本の画像公開が行われている^{①②}。

こうした研究の進展を受けて本研究で課題にしたいのが、「諸本をどう位置づけ、それらの差異をどう捉えるか」、言い換えれば、「多様性をいかに考えるか」という点である。古写本の状態は一つひとつ異なり、製作の動機も異なり、筆跡も文体も文字も多様である。付加・抹消・補訂・註記などがそれぞれに施され、独自の情報を有していることもある。こうした状態がなぜ生じたのかを知るためには、近年の研究環境を十分に生かした方法を取るべきであつて、前時代資料・同時代資料をいかに有効に用いるかが要求される。

昨今、『大正新脩大藏経』(SAT2018)などのデータベースや『浄土真宗聖典全書』などのテキストデータの公開、各研究機関による史料の画像公開やそれらを統合する検索サイト(JAPAN SEARCHなど)の開発などが急速に行われ、仏教典籍に関する研究環境がますます充実してきている。これによって、原典資料・周辺資料を含めた史料の並置、文字・用語単位での検索やデータ処理の便が向上したことによる文献間の比較が可能となってきた。大正・昭和・平成のそれぞれの時代において、『教行信証』や親鸞真蹟が様々な形で公開され、それらによってまた重要な研究が登場してきたことを鑑みれば、近年の資料や情報、データベース公開などの動向は、『教行信証』や親鸞著述に関する分析の精緻さを高め、また新たな知見が得られることが期待される。

一方、文献間の関連性・共通性への着目が高まることで、差異性の議論が等閑視される危険性も孕んでいることは認識しておかなければならない。そこで本研究では「書写と異同」と銘打って、「多様性をいかに考えるか」を課題としたのである。

本研究のように諸本を扱う場合、参照しなければならないのが「翻刻」であろう。主として西洋からもたらされた近代学問の方法や成果は、日本における仏教研究に大きな影響をもたらし、「大藏経」や「聖典」「全書」などという形となって世に出された。それらの編纂過程で行われてきたのは、原本に遡ること、そして、校訂という作業によって正確な本文を製作することである。ある書物の一群において信頼たり得る一本(底本)を基礎とし、諸本(対校本)を照合して誤字などを訂正することで、本文が確定される。確定された本文によって誤読を防いで「正しく読む」ことが可能となる。さらに校註(異文・異読資料)などを通して、豊かな諸本情報を享受することができ。これによって、どのような本文が伝えられてきたのかを「深く読む」ことも可能となる。「翻刻」は本文研究にとって欠かすことのできない基盤であって、これによって享受できる恩恵は甚だ大きい。

「翻刻」が有する「利便性」という有意な特徴を活かすために、それぞれの方針が立てられ翻刻が行われてきた

が、「翻刻」には必ず限界が伴う。誤字はなぜ誤って書き写されたのか。なぜ異体字が用いられたのか。これらは「翻刻」に反映できない場合がある。さらに訓点の相異を示す場合、校合本（対校本）を増やせば増やすほど、異なる文字や読みが生じる。それら一つひとつを拾っていくとなれば、「翻刻」の紙数は際限なく増え、紙面が煩瑣となる。当然のことながら、未知の諸本もあつたであろうが、かつて存在していた散佚本は参照できない。こうした課題を認識した上で、「翻刻」と公開資料を組み合わせ、中世写本の実態を明らかにしていくべきである。

中世写本における課題を考えるために、具体的な例をあげておきたい。親鸞八十四、五歳ころの真筆『西方指南抄』六冊（高田派専修寺蔵）である。まず、各冊の奥書は、書写と校合の年時が入り乱れているように見える。⁴現代であれば、第一冊から読み進めていくことが常であろうが、この奥書はそうではない。なぜこのような順となつたのか。書写実態についての第一の問いが生じる。次に、本文を眺めてみれば、朱による右左訓が多く付されていることに気づく。特に漢文引用文に付されたそれは、単なる文字単位の読みではなく、節や文章単位での異読を同じ紙面に示しているものが含まれる。⁵なぜ複数の読みを示す必要があつたのか。ここに第二の問いが生じる。さらに、第六冊（巻下末）の「法語（念仏大意）」に引用される法照『五会法事讃』は、いずれも親鸞真筆の『教行信証』行巻、『唯信鈔文意』、『見聞集』にも引用・書写されるが、字音の有無、訓読の相異などが見られ、一つとして同じものはない。⁶同一文であっても、親鸞自身が複数の読みを示しているのである。

この二つないし三つの問いは、中世書写のあり方を見直す必要性があることを示唆している。従来求められてきた諸本系統とは異なるあり方、すなわち「中世においては一通りに定めないあり方」があつたのではないか。これを本研究の作業仮説とし、ある特定の時代にどのような「本文」が存在していたのかを把握することで、この仮説の是非を検証し、その理由に迫りたいと考えている。本研究としては、特に第二の問いに着目して議論を進めていきたい。

二、「御自釈」を検討する意味

以上の課題に対して、本研究では『教行信証』の「御自釈」を対象として諸本の検討を行うことで、先に示した作業仮説の是非を問いたい。なぜ「御自釈」に設定するのかといえば、その主たる理由は親鸞自身の作であることによる。『教行信証』は大部分が引用文からなる。そのため親鸞以降の書写者・校合者にとつては、引用原典（経論釈）を入手すれば「校合」や「訂正」が可能である。他方「御自釈」に限っては、伝授者による「口伝」を除けば、諸本校合を行っていたとしても、その書写本作成時以前に存在していたであろう本に限定され、書写時点で存在しうる『教行信証』以外による影響が少なくと考えられる。そこで、書写者が親鸞の文をどう読み、どう書写したのかについて明らかにしやすいことから、「御自釈」を対象として検討を行うこととした。

『教行信証』の歴史的展開においては、書写、出版、延書、正信偈別出、軸装の抄出文などさまざまな形態があるが、「御自釈」も主要なありかたの一つであつて、古くは存覚の頃に別行本が製作された。江戸期以降は版本や「御自釈」を対象とする註釈書が製作されてきたが、「御自釈」の範囲は判者によつて多様である。そこで、「御自釈ではないもの」と対比することで検討範囲を定めたい。

書物としての『教行信証』を成り立たせる要素としては、料紙とそこに記された書き入れがある。書き入れの内容は、『教行信証』の場合、外題、標拳・標列、内題、撰号、本文、尾題、奥書などを主とし、本文に付随するものとして、訓点、註記、補記、声点、合点、貼紙などがある。本文は、引用文が大部分を占め、引用文それぞれには導入部に書名・人師名や願名、「言」「曰」「云」などの引文導入語、引用中途や引用後には「乃至」や「已上」などの引文指示語がある。そして各巻冒頭や引用文の前後、結びなどに親鸞自作の私釈である「御自釈」が並べら

れる。

書き入れの実際について、例として西本願寺本第一冊（総序・教卷）を見てみよう。¹⁰

・ 外題 「顕浄土真実教文類一」（題簽、蓮如筆）

・ 旧表紙見返 「大阿弥陀経……帛延三蔵訳」

・ 内題 「顕浄土真実教行証文類序」（総序）

・ 本文 「竊以難思……所獲得矣」（総序）

・ 標拳 「大無量寿経真実之教
浄土真宗」

・ 標列 「顕真実教一……顕化身土六」

・ 内題 「顕浄土真実教文類一」（教卷）

・ 撰号 「愚禿釈親鸞集」（教卷）

・ 本文 「謹按浄土……教也応知」（教卷）

・ 尾題 「顕浄土真実教文類一」（教卷）

・ 標拳 「大無量寿経真実之教
浄土真宗」

・ 標列 「顕真実教一……顕化身土六」

西本願寺本第一冊の本文は「竊以難思……所獲得矣」（総序）と「謹按浄土……教也応知」（教卷）の二箇所である。その「教卷」の本文を西本願寺本（『縮刷本』一三〇二二）の改行に従って示すと、次のようになる。

① 「謹按浄土……教行信証」

② 「夫顕真実……出世大事」

③ 「大無量寿経言」

- ④ 「今日世尊……問威顏乎」
- ⑤ 「阿難白仏……問斯義耳」
- ⑥ 「仏言善哉……无能遏絶上」
- ⑦ 「无量寿如来会言」
- ⑧ 「阿難白仏……如是之義上」
- ⑨ 「平等覺經言」
- ⑩ 「仏告阿難……普聽諦聽上」
- ⑪ 「憬興師云」
- ⑫ 「今日世尊……即如来上」
- ⑬ 「爾者則此……教也応知」

西本願寺本の教巻本文は改行によつて十三段に分けられる。そのうち③⑦⑨⑪は引用にあつたての書名と引文導入語（「言」「云」）であり、続く④⑤⑥⑧⑩⑫が引用本文（引文指示語「已上」を含む）である。これらを除いた①②⑬が「御自釈」と位置づけられる。

本研究では、こうした手順を経て、本文のうち引用文およびそれに付随する字句等を除いた親鸞自作の文を「御自釈」として位置づけて検討することとした。その際、行格などの書写本の特徴に注意し、^①『聖典全書』や『浄土真宗聖典（註釈版）』（以下『註釈版』）などを参考にしてその範囲を定めた。そのため、「御自釈」中にはいくつかの引用文や所釈の文も含まれる。また、教巻・信巻の冒頭および化身土巻の末尾にはそれぞれ総序・別序・後序が置かれ、行巻末には正信偈があるが、本文の異同を確認する本研究の趣旨からして、これらも対象とした。なお、表記にあつては、総序・教・行・正信偈・別序・信・証・真仏土・化身土・後序の十に区分し、さらに諸文につ

いては、中世写本においては区切りをつけづらいため、読解の便に勝れた『註釈版』所収本の句点を単位として一文とみなし、偈文で構成される正信偈については二句を一文とみなした。『註釈版』における「御自釈」の文数を示すと、次の通りである。

総序	一五文	教卷	一〇文	行卷	一四六文	正信偈	六一文	別序	八文
信卷	一八二文	証卷	二九文	真仏土卷	三三文	化身土卷	二二七文	後序	三六文

次に、「御自釈」を検討するための諸本であるが、いわゆる鎌倉三本（坂東本・西本願寺本・専修寺本）など影印や翻刻が世に出されているものを基準とし、本研究では特に本願寺の宗主が製作に関わり、本願寺に伝わった諸本を対象としたい。時間と空間を限定することによって、同時代において併存していたと思われる『教行信証』の「御自釈」がいかに書写されたのかを窺うことができるからである。具体的には、本派本願寺蔵の次の三本である。第一に西本願寺本（六卷六冊）である。古来真蹟本とされてきたが、現在では文永十二年（一二七五）に坂東本を臨写したのと考えられている。本願寺において『教行信証』の伝授にも用いられたと言われている。¹²⁾

第二に存知授与本（六卷八冊）である。宝徳二、三年（一四五〇―一五一）に書写され、加賀光徳寺の釈性乗に授与された一本である。本願寺第七代存知・第八代蓮如の奥書があることから存知・蓮如両筆本とも称されてきた。¹³⁾ 本願寺系八冊本の一つであり、江戸期以降の刊本などにも影響したと言われている。

第三に善如延書本（延書十七冊）である。延文五年（一二六〇）に本願寺第四代善如が書写し、釈成信に授与した一本である。重見一行によれば、延書本は坂東本の成立過程を知るうえで重要な手掛かりを残しており、そのうち十七冊本の系統は、坂東本初期の漢文底本より延書されたものとされる。¹⁴⁾

これらは、鎌倉時代から室町時代にかけて本願寺という時空間に存在していたと考えられる。検討にあたっては、坂東本や専修寺本（高田派専修寺蔵・真仏書写本）などの諸本も参照する。なお、以後の検討で各本の該当箇

所を示す場合は、西本願寺本は『本願寺蔵『顕浄土真実教行証文類』縮刷本』上下（以下『縮刷本』）、存如授与本は龍谷大学善本叢書三四『顕浄土真実教行証文類』（以下『善本叢書』）、善如延書本は『浄土真宗聖典（原典版）』（以下『原典版』）、また坂東本は『増補親鸞聖人真蹟集成』一・二（以下『真蹟集成』）、専修寺本は『専修寺本顕浄土真実教行証文類』上下（以下『専修寺本』）を用い、それぞれ書名は省略して括弧内に頁数を示す。

三、校異の概観―『聖典全書』『原典版』を基準として―

聊か前置きが長くなった感があるが、ここからは実作業に移ろう。まずは前節で示した区分に基づき、上記諸本を収載する『聖典全書』および『原典版』を参考に、「御自釈」における諸本間の異同について概観したい。

『聖典全書』第二巻所収本は、底本を◎坂東本とし、㊦西本願寺本・㊧専修寺本・㊨存如授与本および①本願寺蔵版本を対校本に用いる。『聖典全書』では、坂東本の損傷が激しい総序から教巻の前半部にかけては上段で坂東本、下段で西本願寺本およびその他校本の校異を示す上下二段で本文が示され、以降は底本に対する校異が脚註に示されている。筆者の概算ではあるが、「御自釈」の校異は左仮名の校異が最も多く三二八、本文四一、註記三六、補記二九、訂記・抹消二四、右仮名二四と続く。同書の凡例および本文の校註から、試みに諸本「御自釈」の異同を窺える本文の校異内容を分類すれば、次のようになる。

- ・文字の相異――本文（文字の相異・追加等）、右仮名（重要なもの）、左仮名、返点^⑬
- ・書き入れ――補記（本文に対する書き入れ）、註記（本文に対して記された註）、訂記（本文に対する訂正の補記）、抹消（文字が消されているもの）
- ・その他――原本の状態に関すること、湮滅・欠失など

次に、『原典版』所収本は、漢文本と延書本の上下二段である。上段は底本を◎西本願寺本とし、対校本に㊦坂東本・㊧専修寺本・㊨存如授与本・㊩大正藏など引用原典、下段は㊪善如延書本を底本とし、対校本に㊫蓮如延書本（本派本願寺蔵）が用いられる。上段の漢文本においては、存如授与本を除いて右仮名も校異対象とされ、鎌倉三本の訓読の相異を把握することができる。上記に準じて「御自釈」における校異を概算すれば右仮名五九一、左仮名二五五、本文八七、訂記・抹消四六、補記三七などであり、その内容を分類すれば、次のようになる。

- ・ 文字の相異——本文（文字の相異・追加等）、右仮名（全て）、左仮名、返点（訓読が変化するもののみ）
- ・ 書き入れ——補記（本文に対する書き入れ）、註記（本文に対して記された註）、訂記（本文に対する訂正の補記）、抹消（文字が消されているもの）
- ・ その他——原本の状態に關すること、湮滅・欠失など

以上、『聖典全書』および『原典版』所収本によって概算した「御自釈」の校異によって、諸本間の異同についてまとめると、次のような特徴が知られる。

- ・ 本文の校異は比較的少なく、右左訓、特に右訓の校異が多い
- ・ 本文や右訓に対する異本情報を有した註記が散見される
- ・ 返点の相異が見られる

四、諸本間の異同（一） 本文

前節で掲げた特徴に基づき、諸本間の異同についての検討を行う。本文の異同は、文字の相異、文言の付加、異本註記に分けることができる。

〈文字の相異〉

まず、同音異字である。『聖典全書』『原典版』の二書において最も多い文字の相異が「回↓囙廻」(囙はいずれも存如授与本)であって、『原典版』に二四例ある。¹⁷⁾「回/廻」は、両字ともに「カイ・エ」の字音である。その他、「齋/齋」「鸞/鸞」など同音異字あるいは通用字とみられる校異が散見される。¹⁸⁾

次に、坂東本訂記前の状態を伝える文字の相異も認められる。

・「譬如日光覆雲霧」(『聖典全書』二卷六一頁⁹⁾)

正信偈の文である。「光」について、坂東本(二四七・前期筆跡)は「月」を「光」と訂記している。存如授与本(四二九)は「月」であり、坂東本訂記前の文字と一致する。善如延書本(二五五)は「光」であって坂東本訂記後の本文である。

・「四專名」(『聖典全書』二卷一九八頁²⁾)

化身土巻・觀經隱顯の文である。西本願寺本(七一四)は「四專名」の「名」を抹消し左傍に「称」と補記している。坂東本(五一六)は「称」を塗抹して「名」と上欄に補記しており、西本願寺本の訂記は、坂東本の下字を示すものとも考えられる。なお専修寺本(五六一)は「四專称」である。

さらに、誤字と思われるものもある。

・「真如一実功德宝海」(『聖典全書』二卷一五頁)

行巻・大行釈の文である。善如延書本(一七三¹⁾)は「功德実海」とあり、『原典版』では校訂されている。三十字上にも「実」とあり、字形の相似に起因する誤字とも考えられる。¹⁹⁾

・「他力真宗之正意也」(『聖典全書』二卷五九頁)

行巻・偈前序説の文である。善如延書本(二五三)は「他力真実」である。形誤と考えられる。

〈文言の付加〉

文言の付加については、化身土卷の二例がある。²⁰⁾

・「離自力之心」(『聖典全書』二卷一九七頁²⁾)

存如授与本(五四二)では「自力之心」の次に「専修者唯称念^{シテ}仏名^ヲ離自力之心」(念は右傍補記)とある。当箇所は、重見氏によれば、浄興寺本において左欄外に補註として示し、真宗寺本において十三字を本文化したとされる。²²⁾ 善如延書本(四九八①)にはないが、蓮如延書本には「自力ノ心ヲハナル 専修トイフハタ、仏名ヲ称念シテ」と左傍補記がある。また文明本(『善本叢書』二九〇頁)にも右傍補記として同文が記されている。

・「五正行」(『聖典全書』二卷一九七頁⁴⁾)

存如授与本(五四二)は「五」の次に「種」を追加している。善如延書本(四九八③)は「種ノ」と右傍補記、蓮如延書本は本文に「種ノ」があつて、存如授与本と同じ文字を保持している。²³⁾

これら二例は、文字の付加によつて、本文内容の充足、あるいは周囲との調整が図られたものと言え、延書本と関連も見られる。存如授与本以前のいずれかの段階で本文文化あるいは註記として存在していたと考えられる。

〈異本註記〉

本文の文言に関わる異本註記は、『聖典全書』の校異に従えば十例ほどを数える。ここでは、信卷・大信嘆徳の例を挙げる。²⁴⁾

・「不可思議不可説不可称」(『聖典全書』二卷九一頁³⁾)

西本願寺本(二〇九)では、もと坂東本(二二四)と同じく「不可説不可称」であつたが、「不可称不可説」と二字を改めている。存如授与本(四五四)は、「不可説不可称」とするが、「不可思議」の下に○印を付し「不可

説」の右傍に「不可称^イ在之」と註記がある。この「イ」の情報に従えば、西本願寺本の語順にあてはまる⁽²⁵⁾。

以上、本文に関する相異について、文字の相異、文字の付加、異本註記の実例を見てきた。本文に関しては、坂東本とその臨写本である西本願寺本はよく一致しているが、その他の諸本において、同音異字・通用字を使用する場面がある。また、誤記や諸本の状態を保存した表記による相異も認められた。以上の相異は、大きく意味の変更を意図しないと思われる相異が大半である。このことは、「御自釈」の書写を考える上で基準とすべき事実である。一方、存如授与本にみられる文言の付加は、先行諸本の状況によるものと考えられる。

五、諸本間の異同 (二) 返点

『聖典全書』の付録では、「御自釈」中の返点校異が五例ある。またそれ以外に『原典版』において返点に関する校異が九例ある。訓読に関わる内容であるため、両書における返点校異箇所を中心に検討を行う。

〈行巻〉

・「言^{ヘリ}以光明名号撰化十方但使信心求念」(『聖典全書』一巻四九頁)

両重因縁における御自釈中引文(善導『往生礼讃』)である。西本願寺本(一五七)は「言^{ヘリ}ニ以光明名号撰化十方但使信心求念」とあって、坂東本(一一五)と同様「言」にかかる二二点の他に引文を訓読するための訓点を付す。存如授与本(四二〇)においては「言^{ヘリ}ニ以光明名号撰化十方但使信心求念」と引用文に対する返点がない。善如延書本(二三四)は「光明名号ヲモテ十方ヲ撰化シタマフ タ、シ信心ヲシテ求念セシムトノタマヘリ」

と読み下している。なお、続く「念仏成仏是真宗」の引用では、諸本は訓点を付さず、善如延書本も「念仏成仏コレ真宗」とするのみである。御自釈中引文は訓点を付すか付さないかの判断が、書写本や引文によって分かれる。

・「无異如来无異法身」(『聖典全書』二巻五四頁)

一乗海積の文である。『聖典全書』付録に「◎无^{マシマサス}ニ異^{コト}如来^{マシマサス}ニ无^{マサス}ニ異^{コト}法身^{マサス}↓◎无^{マサス}ニ異^{コト}如来^{マサス}ニ无^{マサス}ニ異^{コト}法身^{マサス}」とあるように、専修寺本(二四〇)の校異である。善如延書本(二四三)は「如来ニコトナルコトマシマサス^ニ異^{コトナル}ノ法身マシマサス」とある。前半のみ専修寺本と読みを共有している。⁽²⁶⁾

〈信卷〉

・「形身心悦予之貌」(『聖典全書』二巻九四頁)

信一念釈の文である。『聖典全書』付録に「◎形^{アラハス}ニ身心悦予之貌^{カホセヲ} ↓◎形^{アラハス}ニ身心悦予之貌^{カホセヲ} ↓◎形^{アラハス}ニ身心悦予之貌^{カホセヲ} ↓◎形^{アラハス}ニ身心悦予之貌^{カホセヲ}」とある。書き下せば、坂東本(二三三)は「身心ノ悦予ノ貌ヲアラハス」、西本願寺本(三三四)・存知授与本(四五九)は「身心ノ悦予ヲアラハス貌」、専修寺本(二六〇)は「身心悦予ヲアラハス貌」となる。善如延書本(三一五)は「身心ノ悦予ヲアラハスノ兒^{カタチ}」である。「貌」の右仮名を含めれば、三通り以上の訓読が存在している。

・「獲得金剛真心者」(『聖典全書』二巻九四頁)

現生十益の冒頭の文である。『原典版』(三一六頁①)では「獲^{ウケヤク}ニ得^{スレ}金剛真心^{ノハ}者^ハ↓◎獲^{ウケヤク}ニ得^{スレ}金剛真心^{ノハ}者^ハ」と専修寺本の校異が示されている。坂東本(三三四)や西本願寺本(三三三)は「獲得スレハ」と読む。存知授与本(四五九)は「獲^{ウケヤク}ニ得^{スレ}金剛真心^{ノハ}者^ハ」とあつて読みを確定しがたいが、「得」の左訓には「スレ」とある。一方、専修寺本(二六〇)は「獲得スルハ」または「獲得スル者ハ」と読んでいる。後者の読みは善如延書本(三一六)の

「獲得スルモノハ」と一致する。少なくとも坂東本・西本願寺本・存如授与本左訓の「スレハ」と、善如延書本の「スルモノハ」の二つの読みがある。

・「无生而当受生」(『聖典全書』二卷九七頁)

横超断四流釈の文である。『原典版』(三三〇頁⑩)では「无_シ生_{トシテ}而当_ニ受_ク生_ヲ」↓ⓂⓂ无_シ下_生而当_ニ受_ク生_上↓Ⓜ无_シ下_生而当_ニ受_ク生_上↓Ⓜ无_シ下_生而当_ニ受_ク生_上とある。書き下せば、西本願寺本(三三三)は「生トシテマサニ生ヲ受クヘキナシ」と読むのに対し、坂東本(二四〇)・存如授与本(四六一)は「生トシテマサニ受クヘキ生ナシ」と読み、善如延書本(三三二)の「生トシテマサニウクヘキ生ナシ」と同様である。専修寺本(二六八)は「受_ク生_ヲ」と「无_下…当_中…生_上」の返点が混在しているようにみえる。早い段階で訓読に異同が生じているようである。

・「无趣而更応到趣」(『聖典全書』二卷九七頁)

右に続く文である。『原典版』(三三二頁⑪)では「无_シ趣_{トシテ}而更_中応_ル到_ル趣_ト」上↓ⓂⓂ无_シ下_趣而更_中応_ル到_ル趣_上↓Ⓜ无_シ下_趣而更_中応_ル到_ル趣_上と西本願寺本に対して坂東本・存如授与本、さらに専修寺本の校異が示されている。坂東本(二四〇)・存如授与本(四六一)が「趣トシテマタ到ルヘキ趣ナシ」と読み、善如延書本(三三二)と同様の読みを示しているのに対し、西本願寺本(三三四)と専修寺本(二六八)では、二通りの読みが可能となる二重の訓点が付されている。

〈証巻〉

・「亦名一生補処之願」(『聖典全書』二卷一三七頁)

還相回向釈の文である。西本願寺本(四八七)において「亦_ク名_クニ生補処之願_ト」とある。「亦」に付された訓点は誤記と思われるが、抹消されることなく、そのまま書き入れが残されている。

〈眞仏土巻〉

・「酬報大悲誓願」（『聖典全書』二卷一五五頁）

眞仏土釈の文である。西本願寺本（五五三）は「酬^レ報^{ホツケルカ} 大悲誓願^ニ」、存如授与本（五〇八）は「酬^レ報^{スルカ} 大悲誓願^ヲ」、善如延書本（四二五）は「大悲ノ誓願ニ酬報ス^{コタフ}」とある。坂東本（三九九）・専修寺本（四四一）などは「誓願ニ」と読んでおり、存如授与本のみ「誓願ヲ」とする。

〈化身土巻〉

・「立相住心尚不能得」（『聖典全書』二卷一九六頁）

觀經隱顯の御自釈中引文（善導「定善義」）である。西本願寺本（七〇八）・専修寺本（五五七）が「立^テ相^ヲ住^{トモ}心^ニ」と訓点を付すのに対し、坂東本（五二二）および存如授与本（五四二）は「立相住心」に訓点を付さず、善如延書本（四九七）も「立相住心」とある。西本願寺本・専修寺本が読解の要から訓点を付したと考えられる。

・「云九品俱回得不退」（『聖典全書』二卷一九九頁）

小経隱顯の御自釈中引文（善導『法事讃』）である。坂東本（五一九）は全体を返点で挟むが、「九品俱回得不退」と右訓がある。西本願寺本（七一八）は「云^{ヘリ} 九品俱回^{ニテ}不^ト退^ヲ」と返点を付し「退」の右訓「ト」を「ヲ」に訂記したと考えられるが、「云」は二点の俣である。専修寺本（五六五）や存如授与本（五四四）は三点であるが、専修寺本は「退」の右訓「ト」を抹消しているようであり、訓点のない引文であった可能性がある。善如延書本（五〇一）は「九品トモニ廻シテ不退ヲウトイヘリ」と読み、「回」「得」の読みが坂東本・西本願寺本と異なる。

・「名无二之言也」（『聖典全書』二卷一九九頁）

小經隱頭の文である。諸本の訓読を書き下せば、坂東本（五二〇）・西本願寺本（七二〇）・専修寺本（五六六）は「无二名ツクルノミコトナリ」となるが、存如授与本（五四四）は「無二ノミコト二名ツクルナリ」であり、善如延書本（五〇二）の「无二ノ言二ナツクルナリ」と同じ読みである。異なる二つの読みが生じている。⁽²⁹⁾

・「辯説人差別者」（『聖典全書』二卷二〇頁）

結説総勸の御自釈中引文（善導「玄義分」）である。『聖典全書』付録にて、「[㊦]辯^セ説^ハ人差別者」と坂東本と西本願寺本の校異が示されている。西本願寺本（七五八）を書き下せば「人ノ差別ヲ辯説セハ」となり、坂東本（五五一）の「^{フキマツ}辯^ハ説^ハ人差別者」や善如延書本（五二二）の「説人ノ差別ヲ辯セハ」と異なる読みとなる。諸本や引用原典を照らせば、西本願寺本は誤読にあたる。

以上、返点に関する校異の検討により、『教行信証』書写において、かなり早い段階で訓読の相異が生じていたことがわかる。西本願寺本の証巻の例では、誤記をそのまま保存する箇所が見られた。存如授与本においては、目的語にあたる語に付される助詞が他本と異なる場合があった。さらに、御自釈中引文において、返点の有無や付し方によって異読が生じているという特徴もあった。

六、諸本間の異同（三） 右訓

次に右訓である。『聖典全書』に掲げられる重要な右訓校異は、反切が最も多く、『原典版』の右仮名校異では専修寺本の校異が過半を占める。校異内容としては、およそ字音や訓読の相異や有無、誤記などである。さらに「御自釈」中の異本註記に、右訓に関わるものがある。以下、巻の順に従って訓読に関わる相異を中心に検討する。

〈総序〉

・「浄業機彰」（『聖典全書』二卷六頁）

「彰」の訓読について、西本願寺本（七）は「彰^{シテ}」、存如授与本（三八九）は「彰^{シテ}」、善如延書本（一六三）は「アラハレテ」とある。坂東本（一一）は「彰^{シテ}」、専修寺本（一一）は「彰^{アラハシテ}」であり、坂東本・存如授与本・善如延書本の「アラハレテ」、西本願寺本・専修寺本の「アラハシテ」と、二通りの読みが見られる。なお「彰」の字については、化身土巻に「アラハス」の右左訓が多くあり、「アラハレテ」は引文内に類似の訓がある。⁽³⁰⁾⁽³¹⁾

・「救済苦惱群萌」（『聖典全書』二卷六頁）

「救済」の字音の有無について、西本願寺本（七）・善如延書本（一六三）には「クサイ」の右訓があるが、存如授与本（三九〇）には字音がない。坂東本（一一）は字音がなく、専修寺本（一一）には字音「クサイ」がある。ここも二通りの示し方が見られる。

〈教巻〉

・「欲拯群萌」（『聖典全書』二卷九頁）

大経大意の文である。「欲」について、西本願寺本（一四）は「欲^{オホスナリ}」の左傍に「オモテナリ^{イ本}」とある。専修寺本（二五）に「欲^{オモテナリ}」とあり、専修寺本の右訓が西本願寺本の異本情報となっている。
オホシテ也

〈行巻〉

・「名諸仏称揚之願」（『聖典全書』二卷一五頁）

「名」の訓読について、西本願寺本（三三三）と存如授与本（三九六）は「名^ク」とするが、善如延書本（一七三）

は「ナツケ」である。坂東本(二二五)は「名」とあるから、善如延書本はこれに従い、専修寺本(二二七)は「名」とあつて西本願寺本・存如授与本と一致する。

・「破衆生一切无明能満衆生一切志願」(『聖典全書』二卷一九頁)

称名破満積の文である。西本願寺本(四七)は「破」に「スイ本」と左傍註記がある。専修寺本(三八)は「破」とあり、西本願寺本の「イ本」表記に通じる。

・六字釈(『聖典全書』二卷三五～三六頁)

第二文・第三文・第十一文において、右訓や左訓などが豊富に付されている。ここでは、六字釈に含まれる五つの細註について検討する。

まず「帰言」の細註「至也」は、西本願寺本(一一二)に「至」の送り仮名があるのみで他本には見られない。

次に「説字」の細註は、西本願寺本(一一三)・存如授与本(四一一)は「悦エチ音」、善如延書本(二一一)は「悦エチノ音」である。坂東本(八五)は「悦エチ音」とあり、さらに「悦」の右傍に「エチ」、左傍に「ヨロコフ」の角点がある。「ナリ」を付す例が専修寺本「悦エチノコエナリ音」(八九)に見られ、西本願寺本には両本の影響が窺える。

次に二つめの「説字」の細註は次のようである。

西本願寺本(一一三)「税セイノコエナリエチサイノハツクル音 悦セイノコエナリエチサイノハツクル税セイノコエナリエチサイノハツクル二音告 也述也宣セシ二述 人意ノノフル也」

存如授与本(四一一)「税セイノコエナリエチサイノハツクル音 悦セイノコエナリエチサイノハツクル税セイノコエナリエチサイノハツクル二音告 也述也宣セシ二述 人意ノノフル也」

善如延書本(二一一)「税セイノコエナリエチサイノハツクルノ悦セイノコエナリエチサイノハツクル税セイノコエナリエチサイノハツクル二ノ音告ナリ述ノノフルナリヒトノコ、ロヲノヘノフルナリ」

このうち相異が見られる「宣述」について、坂東本は「宣ノフル二述ル」(右傍に「ノフル」の角点)、専修寺本(八九)

は「宣^{セツ}」述^{シツ}スルナリ」「(述)の右訓は「シチ」を「シユツ」に訂記)とある。どれも一致せず右左訓の異同も多い。

次に「命言」の細註は、西本願寺本は「業也招^{マネキ}引也使也教也道也信也計^{ヒク}也召也」、存如授与本は「業也招^{マネキ}引也使也教也道也信也計^{ヒク}也召也」、善如延書本は「業ナリ招引ナリ使ナリ教ナリ道ナリ信ナリ計ナリ召ナリ」とある。相異が見られる「招引」について、坂東本は「招引^{マネキヒク}」(右傍に「メシヒク」の角点あり)、専修寺本は「招引也」である。善如延書本は右訓では字音を示していることから、右左訓が逆となっていると考えられる。

次に「必言」の細註は、西本願寺本(一一四)は「審^{ツマヒラカナリ}也然^{ツマヒラカナリ}也分極也」、存如授与本(四二二)は「審也^{ツマヒラカナリ}然也^{ツマヒラカナリ}分極也^{ツマヒラカナリ}」とある。善如延書本(二二二)は本文として「審ナリ然ナリ分極ナリ」とある。「審」について、坂東本は「審^{ツマヒラカ}」、専修寺本は「審^{ツマヒラカナリ}」とあり、存如授与本においてはそうした右訓でなく、字音が写されている。「然」は坂東本は「然^{シカラシムル}」(右に「シカラシムル」の角点あり)、専修寺本は「然^{シカラシムル}」と西

本願寺本と同様の右訓があり、存如授与本では左訓として示されている。なお、専修寺本(九〇)も善如延書本と同様、「審也」以下七字を細字ではなく本文としている。

六字釈は、坂東本に角点や朱による訂記が多数あり、諸本の書写者もそれぞれ注意した箇所といえる。いずれも右左訓が多いが、例えば西本願寺本の「宣述」の右訓はそのまま訓読できず、右左訓の位置も諸本によつて異なる場合があつて、各々の書写方針に基づく多様な書写実態が窺える。

・「成本願大悲……大宝海水」(『聖典全書』二卷五五頁)

一乗海釈の文である。存如授与本(四二五)は「成^シ」の左傍に「ルイ」とある。坂東本(一三二)・西本願寺本(二八二)・専修寺本(二四四)は「成^ル」、善如延書本(二四六)の読みも「ナル」である。存如授与本の註記は諸

本の情報を記したものと見え、存如授与本の右訓「シ」は文明本（『善本叢書』七二頁）と共通する。

・「煩惱冰解」（『聖典全書』二卷五五頁）

一乗海釈の御自釈中引文である。存如授与本（四二五）は「惱」（右訓無し）に「ノイ」と左傍註記がある。坂東本（一三三）・西本願寺本（一八二）・専修寺本（一四四）のいずれも右訓に「ノ」とあり、これらの情報と思われる。善如延書本（二四六）は後述のように「煩惱ノ」の文言を欠く。

・「撰一切諸仏法」（『聖典全書』二卷五八頁）

一乗嘆徳の文である。西本願寺本（一九四）・存如授与本（四二八）は「撰スルカ」、善如延書本（二五二）は「撰スルカ」と三本一致するが、西本願寺本は左訓には「オサムルカ」とある。これは専修寺本（一五三）の右訓「オサムルカ」に一致する。二種の読みを示した独自の訓読か、専修寺本等に由来する異本註記の可能性がある。

・「真実行願」「真実信願」（『聖典全書』二卷五九頁）

偈前序説の文である。西本願寺本（一九六・一九七）は「真実行願」「真実信願」、存如授与本（四二八）は「真実行願」「真実信願」とあり、善如延書本（二五二）は「真実ノ行願」「真実ノ信願」とある。坂東本（一四二）は「真実行願」（「実」の次に「之」とあったが抹消か）、「真実信願」、専修寺本（一五五）は「真実行願」「真実信願」であって、一様ではないが、「行」「信」とするのは専修寺本に例が見られる。

〈正信偈〉

・「雲霧之下明無闇」（『聖典全書』二卷六一頁）

「闇」について、西本願寺本（二〇一）は右傍に「ノ」（「キ」の古字）のような薄い書き入れまたは汚れがある。存如授与本（四二九）は字音がなく、善如延書本（二五五）は「ヤミ」である。坂東本（一四七）は「キ」とあり

「クラキ」との訓を示していると思われる。「クラキ」「ヤミ」の二通りあることになる。

・「常向鸞処菩薩礼」(『聖典全書』二卷六二頁)

存如授与本(四三〇)は「礼」の左傍に「リ」とある。「礼」の送り仮名は西本願寺本(二〇四)が「タテマツル」、坂東本(二四九)・専修寺本(一六二)が「シタテマツル」である。善如延書本(二五七)も「シタテマツル」であり、送り仮名を「リ」とする本は見当たらない。

・「善導独明仏正意」(『聖典全書』二卷六三頁)

「明」について、西本願寺本(二〇六)は「明」とあるが、存如授与本(四三二)は「明」、善如延書本(二五八)は「アキラカニセリ」である。坂東本(一五二)は「明」、専修寺本(一六三)は「明」である。「セリ」と「ナリ」の二通りであるが、坂東本は「セ」を朱で「ナ」と上書きしているから、西本願寺本は坂東本訂正後、その他は訂正前の文言を伝えていることになる。

・「顕因縁」(『聖典全書』二卷六三頁)

西本願寺本(二〇六)は「縁」、善如延書本(二五八)は「縁ヲ」とあるが、存如授与本(四三〇)は「縁」である。坂東本(一五二)は「縁」、専修寺本(一六三)は「縁」である。「縁二」とする諸本は見いだせない。

〈別序〉

・「披閱」(『聖典全書』二卷六五頁)

存如授与本(四三五)は「披閱」とあるが、坂東本(一五七)・西本願寺本(二一八)は「披閱」、善如延書本(二六一)も「披閱ス」である。存如授与本は次下の文と接続し、二文を一文で読む傾向があるといえる。

・「莫生毀謗」(『聖典全書』二卷六五頁)

西本願寺本（二二八）は「莫^{レトナリ}」であり、存如授与本（四三五）は「莫^シ」、善如延書本（二六二）は「ナカレ」である。坂東本（二五八）は「莫^{レト}」、専修寺本（二七〇）は「莫^{レトナリ}」とある。存如授与本のように「ナシ」と読むのは、文明本（『善本叢書』八九頁）である。

〈信巻〉

・「真實信心」「名号必不具願力信心」（『聖典全書』二卷九〇頁）

「真實信心」について、西本願寺本（三〇八）は「信心^ハ」、存如授与本（四五三）は「真實信心^{ニハ}」、善如延書本（三〇八）は「信心^ハ」である。また、「名号」について、西本願寺本は「名号^ハ」、存如授与本は「名号^{ニハ}」、善如延書本は「名号^ハ」である。坂東本（二二三）、専修寺本（二四八）いずれも「ハ」であり、存如授与本のみ「二ハ」である。なお、覚如『本願鈔』（『聖典全書』四卷二九三頁）には、「真實の信心にはかならず名号を具す」「名号にはかならずしも願力の信心を具せざるなり」とあり、存如授与本はこの読みと一致している。

〈真仏土巻〉

・「論曰歸命尽十方无導光如来也」（『聖典全書』二卷二七九頁）

真反對弁の御自釈中引文（天親『浄土論』）の導入部である。「曰^ハ」について、西本願寺本（六四七）は「曰^ハ」、存如授与本（五二八）は「曰^ハ」、善如延書本（四七〇）は「イヘリ」である。坂東本（四六七）は「ヘリ」を「ヘル」に訂記しているため、西本願寺本・善如延書本は坂東本訂記前の訓読と一致して「也」を不読とし、その他は訂記後の仮名「ヘル」として最後の「也」を読んでいる。専修寺本（五二二）も「曰^ハ」である。

〈化身土巻〉

・「顕開別願中之別願」(『聖典全書』二卷一八七頁⑥)

要門釈勸誡の文である。西本願寺本(六七六)は「顕開^{シタマヘリ}」とあり、存如授与本(五三五)・善如延書本(四八〇)および坂東本(四八六)・専修寺本(五三三)も同様に読むが、西本願寺本の左訓に「ス」とある。坂東本は朱で「シタマヘリ」とあるが、もと「ス」の墨書であった。西本願寺本はこれを左傍に記したものと思われる。

・「勸励極重惡人唯称弥陀」(『聖典全書』二卷一八七頁)

要門釈勸誡の文である。西本願寺本(六七六)は「勸^{レイシタマヘル}三^{セヨト}励^ト」とあり、存如授与本(五三五)

は「勸^{レイシヤヘルナリ}三^{スメハケマス}励^{ハケマス}」とあり、極重惡人唯称^{セヨト}弥陀^ト、存如授与本(五三五)

は「勸^{レイシヤヘルナリ}三^{スメハケマス}励^{ハケマス}」とあり、極重惡人唯称^{セヨト}弥陀^ト、存如授与本(五三五)

は「勸^{レイシヤヘルナリ}三^{スメハケマス}励^{ハケマス}」とあり、極重惡人唯称^{セヨト}弥陀^ト、存如授与本(五三五)

は「勸^{レイシヤヘルナリ}三^{スメハケマス}励^{ハケマス}」とあり、極重惡人唯称^{セヨト}弥陀^ト、存如授与本(五三五)

・「名称所宜」(『聖典全書』二卷一九六頁)

觀經隱顯の御自釈中引文(善導「玄義分」)である。「称^{カナヘリ}」について、西本願寺本(七〇八)は「称^{カナヘリ}」、存如授与本(五四一)は「称^{カナヒテ}」、善如延書本(四九六)は「カナフテ」である。終止形で御自釈中引文を二文に分けて読む本願寺本は専修寺本(五五六)と一致し、接続助詞「テ」を補う存如授与本・善如延書本は一文で読む坂東本(五一二)「称^{カナヒテ}」に近似する。

・「皆蒙解脫」(『聖典全書』二卷一九六頁)

觀經隱頭の御自釈中引文(善導「玄義分」)である。西本願寺本(七〇八)は「蒙^レ」、存如授与本(五四一)は「蒙^レ」、善如延書本(四九六)は「カウフルト」とある。三つの読みがあるが、専修寺本(五五七)は西本願寺本と一致する。存如授与本の「蒙^レ」は坂東本(五一二)、文明本(『善本叢書』二八八頁)に見られる。

・「四專名」(『聖典全書』二卷一九八頁①)

觀經隱頭の文である。坂東本(五一六)・西本願寺本(七二三)は「四」の右訓を「ミハ」とする。両本とも前後では「一^{ニハ}」「二^{ニハ}」「三^{ニハ}」「五^{ニハ}」とあり、「二ハ」が正しい。西本願寺本は坂東本の訓をそのまま写したものと思われる。

・「直為弥陀弘誓重」(『聖典全書』二卷一九九頁)

小経隱頭の御自釈中引文(善導『法事讃』)である。西本願寺本(七一九)は「為^{モテ}弥陀弘誓重^{レルヲ}」、存如授与本(五四四)は「為^{ヨテ}弥陀弘誓重^ニ」、善如延書本(五〇二)は「弥陀ノ弘誓ノヲモキニヨリテ」である。坂東本(五二〇)は「為^{ヨテ}弥陀弘誓重^{レルニ}」、専修寺本(五六六)は「為^{モテ}弥陀弘誓重^{レルヲ}」である。西本願寺本は「為」の右訓を「ヨテ」から「モテ」に、「重」の右訓を「レルニ」から「レルヲ」に改めている。「為」(ヨテ・ヨリテ／モテ)・「重」(カサナレルニ・カサナレルヲ／オモキ)の訓によつて複数の読みが存在し、特に「重」は意味に変化が生じる相異である。³⁷⁾

・「然今特出方便真門」(『聖典全書』二卷二一〇頁④)

三願転入の文である。「特」について、西本願寺本(七五七)「特^{マサニ}」、存如授与本(五五二)は「特^{トニ}」、善如延書本(五二二)は「コトニ」である。坂東本(五五〇)は「特^{ヒトリ}」である。西本願寺本は坂東本の左訓を有しつつ、右訓の「マサニ」は「特」と字形が近似している「將」の訓みとなっているが、坂東本は本文の訂記箇所であり、³⁸⁾

専修寺本（五九五）とともに「コトニ」の上に「マ」とある。これらの影響とも考えられる。

・「欲遂難思議往生」（『聖典全書』二卷二二〇頁）

三願転入の文である。「欲」はすでに教巻で検討しており、「オホスナリ」「オモテナリ」「オホシテナリ」などの訓があった。ここでは、西本願寺本（七五七）・存知授与本（五五二）は「欲」であるが、善如延書本は「オモフ」である。坂東本（五五〇）の右訓は「ス」を「オモフ」と朱で訂記しており、この読みを伝えるのが専修寺本（五九六）の「欲」である。「オホス」と「オモフ」の二種の読みは、坂東本の訂記に関わる相異といえる。

〈後序〉

・「諱守成」（『聖典全書』二卷二五四頁）

皇帝佐渡院の細註「諱」について、西本願寺本（九一八）では右訓を「イナミ」とする。太上天皇後鳥羽院の細註「諱」（九一六）の左訓も「イナミ」である。二度続いており、単純な誤記と言いつい難い状況がある。

・「真影銘」（『聖典全書』二卷二五四頁）

西本願寺本（九二〇）は「真影」銘メイ、存知授与本（五九〇）は「真影銘」、善如延書本（五九九）は「真影ノ銘ハ」である。西本願寺本は専修寺本（七二九）「真影」銘メイと同じく送り仮名「ハ」を付さない。一方、坂東本（六七四）は、「真影銘」とあるが、「銘」の右訓「ハ」を「ニ」と朱で訂記しており、存知授与本・善如延書本は坂東本訂記前の文字を有している。

・「慶哉」（『聖典全書』二卷二五五頁）

西本願寺本（九二二）は「慶哉^{ヨロコハシイカナ}」、存如授与本（五九〇）は「慶哉^{ヨロコハシキカナヤ}」、善如延書本（六〇〇）は「ヨロコハシキカナ」である。坂東本（六七七）・専修寺本（七三二）は「慶哉^{ヨロコハシイカナ}」であるから、鎌倉三本は「慶」を「ヨロコハシイ」と読む。ただし、西本願寺本は「慶」の右訓「キ」を「イ」と上書きした上で右傍に「イ」と訂記しており、坂東本あるいは専修寺本の情報によって訂正したものと考えられる。

・「可仰信敬」（『聖典全書』二卷二五五頁）

「仰」について、存如授与本（五九〇）は「仰^チ」、善如延書本（六〇一）は「アフイテ」であるが、西本願寺本（九二四）は「仰^{オホヘテ}」とある。「慶哉」の段では「良仰^{トニヲラク}」とあるが、後序『選択集』の段の最後に「仍^{ヨソテチ}抑^{オサヘ}」とあり、西本願寺本は「抑」の訓を示したものと思われる。

以上、右訓に関する校異では、特に六字釈や後序には相異が多く見られたが、「御自釈」全体の数から言えば、相異数は必ずしも多くない。その上で、相異箇所における坂東本と存如授与本・善如延書本の近似性、または西本願寺本と専修寺本の近似性は指摘できる。ただし、全て対応しているわけではなく、諸本の関係性は一律でない。坂東本の訂正自体が諸本に影響しており、その坂東本を基準として展開したと考えられる諸本においても、右訓の相異がある。早い段階で複数の読みが生じており、訂正も行われたと考えられる。訓読はあくまで書写者による最終的な筆記によるものであり、右訓は書写原本による読みを伝えると同時に、諸本の情報を寄せ、本文をどう音読・訓読するかを課題として施されたものと考えられる。

七、諸本間の異同(四) 延書

最後に漢文本と対比した時の延書本の特徴として、文言の不在、訓読の相異、左訓での訓読に関わる三点を検討する。

〈文言の不在〉

・「イヒオハルコトハナリ」(『聖典全書』二卷七頁)

総序の終わり「矣」に付される書き入れである。西本願寺本(二〇)・存如授与本(三九〇)は「イヒオハルコトハナリ」とあるが善如延書本(一六四)には「矣」にあたる字も書き入れもない。坂東本(二三)は欠失しており、専修寺本(一三)は「イヒオハルコ、ロナリ」とある。中山寺本(『善本叢書』五九六頁)にもこの書き入れはない。

・「破衆生一切无能満衆生一切志願」(『聖典全書』一九頁)

行巻・称名破満積の文である。善如延書本・蓮如延書本(『原典版』一八〇頁③)ともに「无明ヲ破シ ヨク衆生ノ一切ノ」の十三字を欠く。

・「煩惱氷解」(『聖典全書』二卷五五頁)

行巻・一乗海釈の文である。善如延書本(二四六)は「煩惱ノ」がなく、蓮如延書本は「煩惱」と右傍補記する。

・「仏道正因故」(『聖典全書』二卷九五頁)

信巻・信一念釈（一念転釈）の文である。西本願寺本（三三七）では「仏道正因ナルカニ 故」とあり、存如授与本（四六〇）も同様であるが、善如延書本（三二七）は「仏道ノ正因ナリ」とあって、「故」にあたる読みがない。中井玄道によれば、存覚本は「故」の位置に「也」を置き、「故」を次の「論註曰」に付け、延書本も同様に「故」を次の句に属しているという³⁹。善如延書本は続く文で「カルカユヘニ論ノ註ニイハク」としているが、善如延書本ではおおよそ、「故」を「カルカユヘニ」と読む傾向があるため、それに従い、次句に付したものと思われる⁴⁰。

・「悲哉愚禿鸞」（『聖典全書』二卷一〇五頁）

信巻・悲歎結釈の文である。善如延書本（三三四）は「愚禿」とあり「鸞」がない。これは専修寺本（二九〇）と共通する⁴¹。なお、坂東本（二五八）は後期筆跡箇所である。

・「諱」（『聖典全書』二卷二五三頁）

後序の文である。善如延書本（五九八）は「後鳥羽ノ院ト号ス」「土御門ノ院ト号ス」「佐渡ノ院」とあり、それぞれ「諱尊成」「諱尊仁」「諱守成」にあたる文字がない。なお、同じく後序の「禅定博陸」について、善如延書本（六〇〇）の細註は「月輪殿法名圓照」とし、こちらは「兼実」を欠いている。

〈訓読の相異〉

・「顕真実教」（『聖典全書』二卷一三三頁）

教巻・六句嘆釈の文である。善如延書本（一七一）は「真実ノ教ヲ顕スノ」とする。漢文諸本（西本願寺本・二二ほか）に訓点はないが、専修寺本（二二）に「顕真実教」とあり、専修寺本左傍の訓点と一致する⁴²。

・「无到光明土」（『聖典全書』二卷四九頁）

行巻・両重因縁の文である。善如延書本（二三四）では「イタリカタシ」とある。漢文諸本（西本願寺本・一五

六ほか)は「到ルコトナシ」と読むため、「无」を漢字では難や叵にあたる「カタシ」と読んでいることになる。

・「信知」(『聖典全書』二卷六〇頁)

行巻・偈前序説の文である。西本願寺本(一九九)・存如授与本(四二九)の「信知」に対し、善如延書本(二五三)は「シリテ」とある。⁽⁴³⁾漢文本の「シテ」を「信知」二字に対する「シリテ」の略として判断して延書されたとも考えられる。

・「入正定聚益」(『聖典全書』二卷九五頁)

信巻・現生十益の文である。漢文諸本は西本願寺本(三二五)のように「入_ル正定聚_ユ益」として、現生十益のうち唯一訓点が付されている。一方、善如延書本(三二六)は「入正定聚益」と、表記の統一性を重視している。

・「云無過念仏往西方三念五念仏来迎」(『聖典全書』二卷一九九頁)

化巻・小経隠顕の文である。漢文本(西本願寺本・七一八ほか)は引用部に訓点はないが、善如延書本(五〇一)は「念仏シテ西方ニユクニスキタルハナシ 三念五念マテモ仏来迎シタマフ」とあり、読み下している。

・「人我自覆」(『聖典全書』二卷二〇九頁)

化巻・真門釈結示の文である。漢文本は坂東本(五四八)や西本願寺本(七五五)に「自_ノツカラ」⁽⁴⁴⁾とあるように「オノツカラ」と読むが、善如延書本(五二二)は「ミツカラ」としており、意味が変化する。⁽⁴⁵⁾

〈左訓での訓読〉

・「无所导」(『聖典全書』二卷五九頁)

行巻・一乘嘆徳の文である。西本願寺本(一九五)「无_カ所_ル导_ル」・存如授与本(四二八)「无_カ所_サ导_ル」のように漢文本は訓点を付すが、善如延書本(二五二)は「所_サ导_ルナキ」と書き下さず左訓で訓読を示している。⁽⁴⁶⁾

・「如彼名義欲如実修行相応故」(『聖典全書』二卷九〇頁)

信巻・三信結嘆の御自釈中引文(天親『浄土論』)である。善如延書本(三〇八)では、左訓に「カノミヤウキノコトク」、「シチノコトクシユキヤウシサウオウセムトオモフカユニト」とある。御自釈中引文を漢文のまま写しつつ、左訓で読みを示している。

・「往生之業念仏為本」(『聖典全書』二卷二五四頁)

後序に示された『選択集』標宗の文の細註である。漢文諸本は白文であり、善如延書本(五九九)も同じく書き下していないが、左訓で「ワウシヤウノコフニハナムフチヲホントストナリ」と読みを示している。⁴⁵

以上、延書本では、漢文本と比較すると、文言を欠く箇所が散見される。漢文をどう読み、延書化するかしないかが、延書本特有の課題としてあるが、漢文本と延書本が同じ時空間にある場合、二種の文が併存する状態にあり、それぞれの本文を重視して存在していた。また、「故」のように定型的な処置をとっている箇所があり、周辺諸本のみならず、書写本内の周辺状況にに応じて統一が図られたことが窺える。

八、諸文併存の意味

本研究では、『教行信証』「御自釈」を対象として諸本間の異同に着目し、いかなる相異が生じているのかを検討してきた。前節までに、西本願寺本・存如授与本・善如延書本を中心とする異同の概要を把握し、坂東本・専修寺本等を含めた「御自釈」における諸文の異同について、次のことが確認された。

・本文は同音異字を除いて大凡一致しているが、右訓や返点において、一様ではない読みが併存している。

- ・ 御自釈中引文に関しては、白文、字音のみ、訓読などの複数の示し方がある。
- ・ 一つの書写本内で同文・同構文の訓読に関する統一が行われている。

異同の理由としては、諸本が同時に存在し、それらを参照して諸本が製作されたことがその要因と考えられる。その諸本の情報は、次の三種があった。第一に坂東本由来の情報を写したものであり、坂東本訂正前と訂正後に分かれている。善如延書本は前者、西本願寺本が後者に該当することが多かったが、西本願寺本が坂東本訂記前の情報を有している場合もあった。第二に同時代に存在していた他本であり、右訓・左訓・異本註記に表れている。西本願寺本に専修寺本の情報が多く見られること、存如授与本と善如延書本あるいは文明本の一致が見られることが挙げられる。真宗聖教中の訓読文と延書文の関連も見られ、善如延書本と覚如撰述中の訓読文の一致する例もあった。第三に、諸本ごとの書写方針に基づく要素がある。西本願寺本が保存する坂東本の情報、存如授与本における引文を一文で読ませる訓読法、「酬報大悲誓願」「顕因縁」における助詞「ヲ」と「ニ」の異同、善如延書本の表記統一などがこれにあたる。こうした状況によって、諸本間において、坂東本・西本願寺本・専修寺本、存如授与本と善如延書本、善如延書本と専修寺本、存如授与本と文明本、存如授与本と蓮如延書本、善如延書本と中山寺本の共通項が見られた。鎌倉三本を中心とし、坂東本の各時点での文字に加えて、諸本情報の参照、書写方針による統一などが行われ、諸本ごとの重層的な関連性が生じたが、それぞれの本文は保存されたのである。

以上を承けて、こうした諸文併存の意味や背景を考察したいと思う。『教行信証』は、親鸞自筆が残されていることから、著者自筆原本が不在である諸作品と比べれば一元的である。しかし、それと同時に、坂東本自身の成立過程において訂正がなされ、それがある時点で他者が書写することで異文が生じてきた。書写本成立時の周辺状況や書写本内の表記統一の観点からさらに異文が生じ、時に異本註記が施された。こうした意味では多元的でもある。従来の研究で明らかにされてきた坂東本を中心とした諸本系統とは別に、諸本それぞれが複数の本を参照して

本文を整えていったことである。

こうした特徴が現れる背景としては、どのようなことが考えられるであろうか。それは、真宗聖教がどのように書写されてきたのかとも関わる事項である。書写の動機や経緯については、奥書・識語等に記される場合が多く、『教行信証』諸本の奥書には次のような文言が見られる。

・ 尊蓮奥書 「文義字訓等重委註了」(曆応本・信巻本奥書ほか、『善本叢書』九七九頁)

・ 乗専奥書 「於写本者以聖人真秘本加写合云々於写本者以松陰助阿之証本重令校合而已」(同右)

・ 文明本奥書 「雖有文字不審如本写畢」(龍谷大学蔵、『同』九七七頁)

・ 正応版本跋文「然此本者以親鸞自筆御本令校合成印板者庶幾後生勿令加減於字点矣」

(高田室町末期本ほか、『善本叢書』九八三頁)

これらからは、聖教の一字一字、訓点に至るまでを丁寧^④に書写・移点しようとする姿勢が窺える。おおよその本文はこうして厳格に書写されたであろう。一方で、書写本の製作にあたっては、その時点で存在している親鸞自筆本を中心とする何らかの本を参照し、眼前に異文がある場合は、それらを尊重しつつ、書写者自身で判断を加えて、書写・加點・註記が行われた。そして書写行為には必ず誤謬が伴う。異読や誤謬は、次の書写者がそのまま写すこともあれば、校合して訂正することもあり、異本情報として本文に付随する書き入れを施すこともある。さらに、書写方針によって、構文や訓読の統一が行われ、あるいは文言の不在(削除)が生じているのである。

おわりに

『教行信証』は親鸞在世中より、門弟による書写が行われ、時の経過とともに諸本は増加し、散逸分も含めて幾

多の諸本が存在していた。異文や異読の発生には、書写行為に必ず伴う誤謬のみならず、書写者の訂正、註釈や解釈が介在し、なおかつ書写者自身によって音訓や構文が統一されることもあった。しかし異文や異読は必ずしも否定・排除されるものではなく、書写という営為の中で考証され、何らかの形で書写本のうちに保持された。親鸞自身の言葉を受け継ぎ、他の要素の影響しにくいと考えられる「御自釈」において、遡れば親鸞自筆（坂東本）に行き着くであろう本文は、「諸本系統」に留まらない書写のあり方によって、「多様性」をもって伝持され、時に異文を有する本が同時・同所に存在したのである。今後、先に示した『教行信証』の歴史的展開や、引用や註釈における本文享受の状況の検討を重ねることで、さらに具体的な読者の営為が明らかになるであろう。

現代に生きる我々は、所蔵者や研究者によってますます公開されつつある諸聖教・史資料の原本や複製などを見する機会を得ることができる。このことも、画一的・排他的ではない『教行信証』テキストへの対し方が受け継がれてきたからこそ可能であることを改めて認識し、書写という営為が諸文の併存という事態に表れていることそのものが、『教行信証』が幾多の人々に読まれてきた歴史でもあることと受けとめなければならない。

【註】

- (1) 赤尾栄慶・宇都宮啓吾監修・執筆『坂東本『顕浄土真実教行証文類』角点の研究』（東本願寺出版、二〇一五年）参照。
- (2) 龍谷大学善本叢書三四『顕浄土真実教行証文類』（永田文昌堂、二〇二〇年）ほか。
- (3) 近年、『大正蔵』など近代成立大蔵経の成立（校正）状況について明らかにされている。仏教大学宗教文化ミュージアム図録『近代の大蔵経と浄土宗』（二〇一四年）、同講演録『縮刷蔵経から大正蔵経へ』（二〇一四年）、『新編大蔵経 成立と変遷』（法蔵館、二〇二〇年）などに詳しい。
- (4) 『西方指南抄』各冊奥書による親鸞の書写・校合の年時は次のようである（『浄土真宗聖典全書』第三卷所収本参照）。なお上本・中本は奥書には「康元元年」とあるが、「康元二年」と考えられている。

- (4) 上本（康元二年正月二日・写） 上末（康永元年十月十三日・写） 上末（康元二年正月一日・校）
 中本（康元二年正月二日・写） 中末（康元元年十月十四日・写）
 下本（康元元年十月三十日・写） 下末（康元元年十一月八日・写）
- なお、『西方指南抄』奥書の年時については、『西方指南抄』ダイジェスト版（別冊）の新光晴『西方指南抄』解体修理からの新事実』、清水谷正尊『西方指南抄』について（いずれも二〇一三年、同朋舎）に詳しい。
- (5) 例えば、「必得往生」カラスワウジヤウラトルトナリ（『聖典全書』三卷八六四頁）では、右訓で字音を表記し、左訓で訓読を示す。さらに複雑なものとしては、「浄土宗意、本為凡夫、兼為聖人也」ケホトハゴボクノタメナリ カネテハシヤウコンノタメナリ（『同』八七二頁）などがある。この例からは、字音、訓点（漢文としての訓読）、左訓（和文としての訓読）は異なる行為であることが窺える。
- (6) 『見聞集』（『聖典全書』二卷九五三頁、親鸞六十三歳の書写）、『教行信証』行巻（『同』二卷三九頁）、『唯信鈔文意』（『同』二卷六九二頁上段、康元二年正月二十七日日本）、『西方指南抄』下末（『同』三卷一〇三九頁、康元元年の書写）。なお、「念仏大意」は『和語灯録』巻（『同』六卷四六二～四七三頁）にも収録されている。
- (7) 『教行信証』の依拠本に関わる研究として、佐々木勇「坂東本『教行信証』引用「日藏経」「月藏経」の依拠本について」（『仏教史学研究』五七―一、二〇一四年）、藤原智「『教行信証』の引用文について―古写経本による再検討―」（『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト研究紀要』三、二〇二〇年）などがある。
- (8) 宮崎圓遵「親鸞聖人書誌」（著作集第六卷『真宗書誌学の研究』所収、思文閣出版、一九八八年）参照。
- (9) 鳥越正道「最終稿本 教行信証の復元研究」（法蔵館、一九九七年）一八四頁参照。なお、鳥越氏は「正信念仏偈」を御自釈に含まないが、本研究では諸本の異同を主眼に置いたため、親鸞自作の文として検討対象に加えた。
- (10) 西本願寺本の書誌事項については、「縮刷本」および同書所収の解説を参照した。
- (11) 西本願寺本では、朱註などと組み合わせ改行や空白を多く取ることで、諸文の区別を明瞭にしている（拙論「西本願寺本『教行信証』における註記の特徴について―坂東本との比較から―」（『印仏研』六二―一、二〇一三年）参照）。その他、坂東本・西本願寺本・専修寺本が揃って他力釈や三問答前の空白がある点、また後序が新たな下から書き始められる点などが認められる。書写本ごとの特徴とともに諸本に共通する特徴も見られ、これらは「御自釈」の範囲を定めるために大いに参考となる。
- (12) 覚如による大町如道への『教行信証』伝授に用いられたと考えられている。「西本願寺本『教行信証』の特色について」（『縮刷本』下所収）参照。また、書式などによって筆者を明らかにしようとした研究に田中真『顕浄土真実教行証文類』西本願寺本の

- 筆者に関する一考察」（『浄土真宗総合研究』一四、二〇二一年）がある。
- (13) 『聖典全書』解説（二巻五頁）によれば、奥書を有する教巻と化身土巻末（奥書のみ）が存如筆、行巻と真仏土巻が蓮如筆、その他の巻が右筆の書写とされる。
- (14) 重見一行『教行信証の研究—その成立過程の文献学的考察—』（法蔵館、一九八一年）三六六頁。
- (15) 翻刻においては、同一の校異番号に対して複数の校異内容が含まれていることが多くあるため、必ずしも校異番号の数と筆者による概算数は一致しない。ここに示した概算数はあくまでも校異内容ごとの多少を把握するための参考であることに留意されたい。
- (16) 『聖典全書』第二巻「宗祖篇上」巻末の付録『顕浄土真実教行証文類』返点校異」に収録されている。
- (17) 中井玄道校訂『教行信証附録』（一九八二年仏教児童博物館刊の復刻版を用いた）五三頁（教巻一頁④）では、縮刷蔵経の「廻」に対して、江戸期刊本四本・坂東本・西本願寺本は「廻」、渋谷本・高田明治本は「廻」を示し、『正字通』によって「回」は俗に「廻」「廻」とされるが、「廻」は縮刷蔵経の字体が正しいと指摘している。
- (18) 『聖典全書』および『原典版』で確認できる同音異字の校異例に、「齊／齋」、「鸞／鸞」、「囁／属」、「辯／辨」、「慧／恵」、「邪／耶」、「蜜／密」、「歎／嘆」、「土／渡」、「照／昭」がある。また、善如延書本では教巻冒頭「案」（『原典版』一六七頁）は、『原典版』上段の漢文諸本は西本願寺本・坂東本・存如授与本が「按」、専修寺本が「案」であり、「按／案」もここに加えられる。なお、『善本叢書』の翻刻「付校合」において校註では、「無／无」「回／廻」「即／則」「咲／笑」「歎／嘆」「廢／癡」「大／太」「孝／考」「諸／緒」「制／製」が確認され、これらも同音異字または異体字と考えることができる。
- (19) 中井玄道前掲書五七頁（行巻一頁⑤）では、寛文本が「実」であるが「形誤」と判断している。
- (20) 存如授与本における文字の付加については、『教行信証』テキスト論「その生成と展開」（博士論文、龍谷大学、二〇一八年）第六章第二項において検討し、浄興寺本に近い本文であることを確認している。
- (21) 中井玄道前掲書一八四頁（化土巻本三六頁①）によれば、この十三字を加えるのは寛永本・正保本・明暦本・寛文本・渋谷本の江戸期刊本である。展転書写の際攪入したといい、古来、諸解釈が加えられてきたという。
- (22) 重見一行前掲書九一頁参照。
- (23) 中井玄道前掲書一八四頁（化土巻本三六頁④）によれば天文延書本にもなし。
- (24) なお、存如授与本における異本については、『教行信証』テキスト論「その生成と展開」（博士論文、龍谷大学、二〇一八年）第六章第三項「存如授与本と異本」において「正信偈」の六例を検討しているので、そちらを参照されたい。

- (25) なお、行巻・一乘嘆徳では「不可説不可称不可思議至徳」(『同』二卷五八頁)、至心釈では「不可思議不可称不可説至徳」(『同』二卷八〇頁)とある。
- (26) 中井玄道前掲書九三頁(行巻九四頁①)によれば、存覚本は「如来二異ナルコトナク、法身二異ナルコトナシ」と点じ、善如延書本と専修寺本の中間的な訓点を有していると思われる。
- (27) 中井玄道前掲書一九九頁(信巻末一〇頁④)によれば、存覚本は「生ナクシテ当ニ生ヲ受クベシ」と点じている。
- (28) 中井玄道前掲書一九九頁(信巻末一〇頁④)によれば、存覚本は「趣ナクシテ更ニ到リ趣クヘシ」と点じている。
- (29) 中井玄道前掲書一八五頁(化土巻四二頁①)では、寛永本・正保本・明暦本・寛文本が「無一ノ言ニ名クルナリ」と点じていることにつき「穏かならず」と注意している。
- (30) 化身土巻・観経隠蹟に多く、「言彰者」(『聖典全書』二卷一八七頁)では坂東本(四八八)・西本願寺本(六七七)は「アラハス」の左訓が、「依彰之義也」(『聖典全書』二卷一九八頁)では坂東本(五一八)・西本願寺本(七二六)は「内ニアラハス」の左訓があるなど、「アラハス」の訓が見られる。
- (31) 行巻大行釈・元照『弥陀経義疏』の「彰_ニ於四字」(『聖典全書』二卷四四頁)、戒度『正観記』の「総_ヲ彰_ル於四字」(『同』二卷四五頁)、信巻真仏弟子釈・善導『往生礼讚』の「自然_ニ彰_ル」(『同』二卷一〇一頁)。
- (32) 註1、一七八頁参照。
- (33) 註1、一七八頁参照。
- (34) 註1、一七八頁参照。
- (35) 中井玄道前掲書九六頁(行巻二二四頁⑤)によれば、存覚本は「仏ノ正意ニ明ナリ」とある。専修寺本や善如延書本に見られる「正意ニ」と、坂東本訂正前の「明ナリ」の訓を有している。
- (36) 「フ」と「ニ」の相異について、当箇所近くの例では「報土因果顕誓願」がある。中井玄道前掲書九六頁(行巻一一三頁①)では、明暦本・高田明治版本・坂東本・西本願意本・存如本が「誓願ニ顕ス」と点じ、寛永本・正保本・寛文本・洪谷本・延書本は「誓願ヲ顕ス」と点じているという。
- (37) 中井玄道前掲書一八五頁(化土巻本四一頁①)では、『法事讃』の本文が「タゞ弥陀弘誓ノ重キガ為ニ」と読む意であり、寂如校訂本が「重キガ為ニ」、智暹本が「重キニ為テ」と点じているという。
- (38) 総序において西本願寺本(八)の「特_ニ」に対して専修寺本(一一)で「将_ニ」としているため、字形の相似による誤記の可能性が考えられる。

- (39) 中井玄道前掲書一一八頁(信卷末六頁②)。
- (40) 特に延書本においては、御自釈中引文の処置や、「者」を「トイフハ」、「故」を「カルガユヘニ」などと書き下すことなどに特徴が見られ、存覚あるいは覚如が行ったと思われる延書化にあたっての規則性や定型があったと考えられる。
- (41) 中井玄道前掲書一二五頁(信卷末二九頁⑤)によれば存覚本にも「鸞」がない。
- (42) 『聖典全書』第二卷付録の「返点校異」参照。また、中井玄道前掲書五六頁(教卷七頁②)によれば、渋谷本・智暹本も延書本のように点じる。
- (43) 本書の用例としては、行巻・行一念釈(『原典版』二三五頁)の三例は「信知ス」「信知シテ」「マコトニシヌ」、信巻『集諸経礼懺儀』(『原典版』二八五頁)の二例は「信知シ」「信知シテ」である。
- (44) 延書本において「自」を「ミツカラ」と読む例について、中井玄道前掲書六五頁(行巻二二頁⑧)では、『十住毘婆沙論』の「若人念我称名自歸」の「自」を挙げ、論の当分は「ミツカラであるが、自然の義をあらわすため「オノツカラ」としたことを指摘しつつ、延書本が「ミツカラ」であることを示している。なお、西本願寺本(七五五)には同頁最終行に「自^{ミツカラ}」とある。
- (45) 行巻『選択集』引用では、善如本(二三三)は「往生ノ業ニハ念仏ヲ本トス」とある。西本願寺本(一五三)、存如授与本(六一)、および坂東本(一一三)、専修寺本(一一二)も同様の読みであって、後序における善如延書本左訓に通じる。
- (46) 『唯信鈔文意』願得寺藏康永四年乗専書写本の実悟筆と思われる裏表紙裏貼紙には「コノ文ヲウツサンヒトハカミノカスノ行ノカスコレニタカフヘカラス タトヒノ異本アリトイフトモ コノ門徒ニノライテハ末代ニイタルマテ一字ヲモクハヘトスコトアルヘカラス」とある。本派本願寺宗学院編『古写古版 真宗聖教現存目録』第一輯(興教書院、一九三七年)一三〇頁参照。